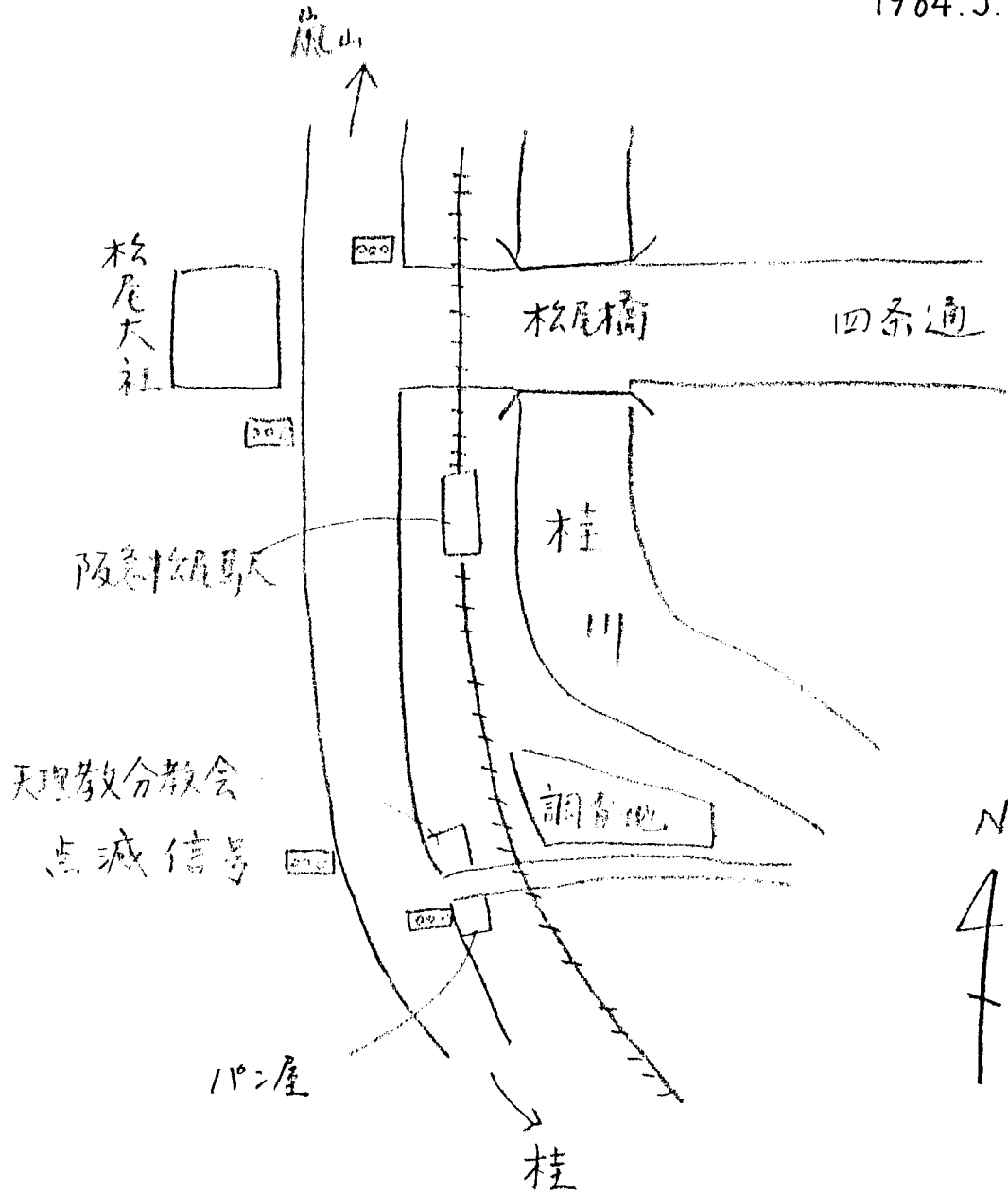


市立桂中学校北分校の建設に伴う発掘調査

現地説明会資料

1984.3.11



阪急松尾駅より徒歩10分

経過

発掘調査の対象地は桂川西岸の京都市西京区松室中、溝町に位置している京都市立桂中学校北分校建設予定敷地約1万7千 m^2 である。同地は古墳時代～古代において最大級の渡来系氏族とされる秦氏が本拠地を置いた葛野郡域内である。秦氏の氏神を祭る松尾神社は同じ桂川西岸の同地西北方向約700mに現存している。今年この地に京都市立桂中学校北分校を建設するほこびとなった。その

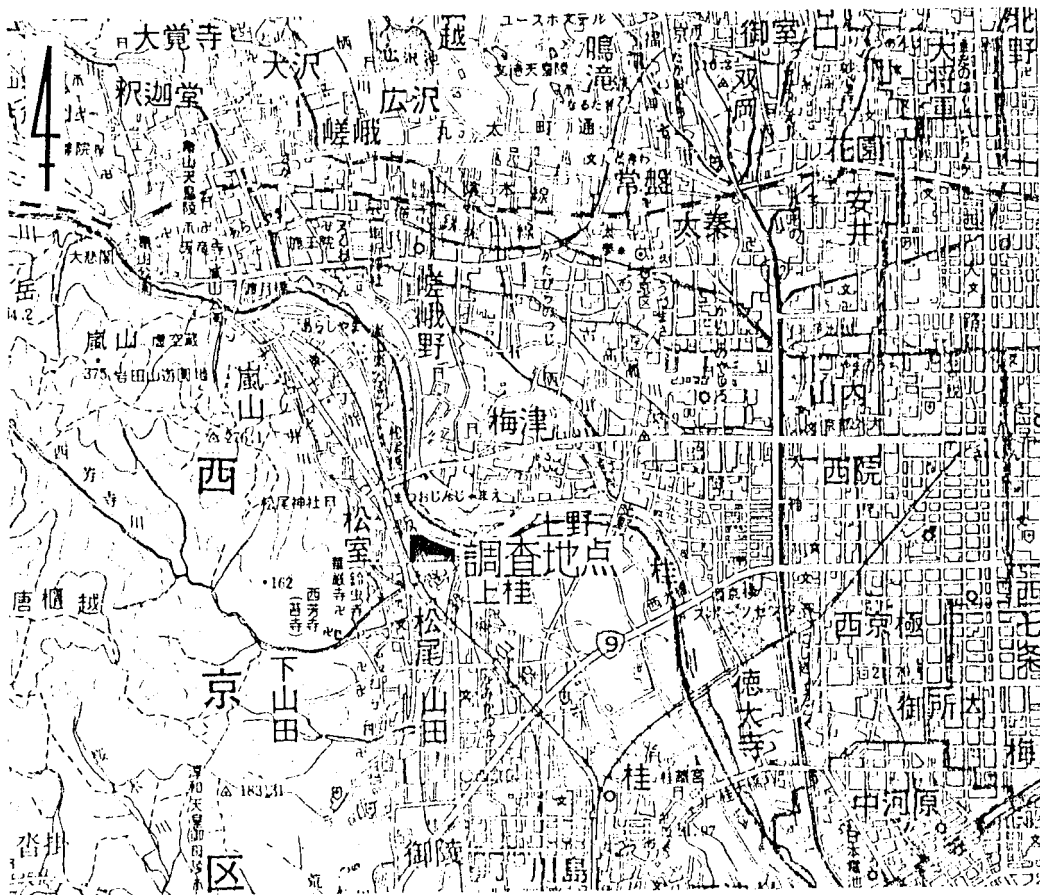


図-1 調査地点位置図(1/50000) 0 3 km

建設にともない、遺跡台帳上では周知の遺跡外ではあったが同地域の歴史的重要性を鑑み、京都市埋蔵文化財研究所が今年10月5日から20日までの二週間にわたり遺跡の有無を確認すべく試掘調査を実施した。

試掘調査では、現表土下50cm前後の遺構面上で、掘立柱の建物群、流路跡と思われる遺構や、古墳時代の溝等の遺構を検出した。この遺構面はその上に中世の遺物包含層が堆積しており、また古墳時代の溝の肩を形成する土層(図-3 ㊦黒灰色粘質土)は、弥生土器片と思われる土器小片を包含している。

図-2 に実測図を掲載した土器は SX-1 上面から出土した須恵器・杯身、高杯である。両者とも古墳時代後期(6世紀代)に位置づけえるものである。

試掘調査の結果、同地には古墳時代後期の遺構群が確実に遺存していることが判明した。加えて下層には弥生時代の遺構群が遺存している可能性も大きく、集落址等によって構成される大規模な弥生-古墳時代の複合遺跡となる可能性もある。流路跡

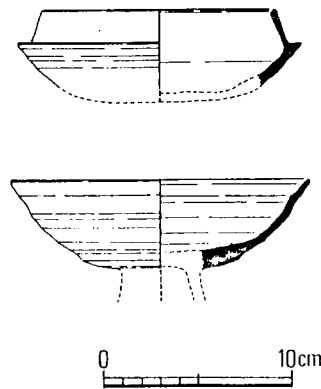


図-2
試掘調査出土遺物実測図

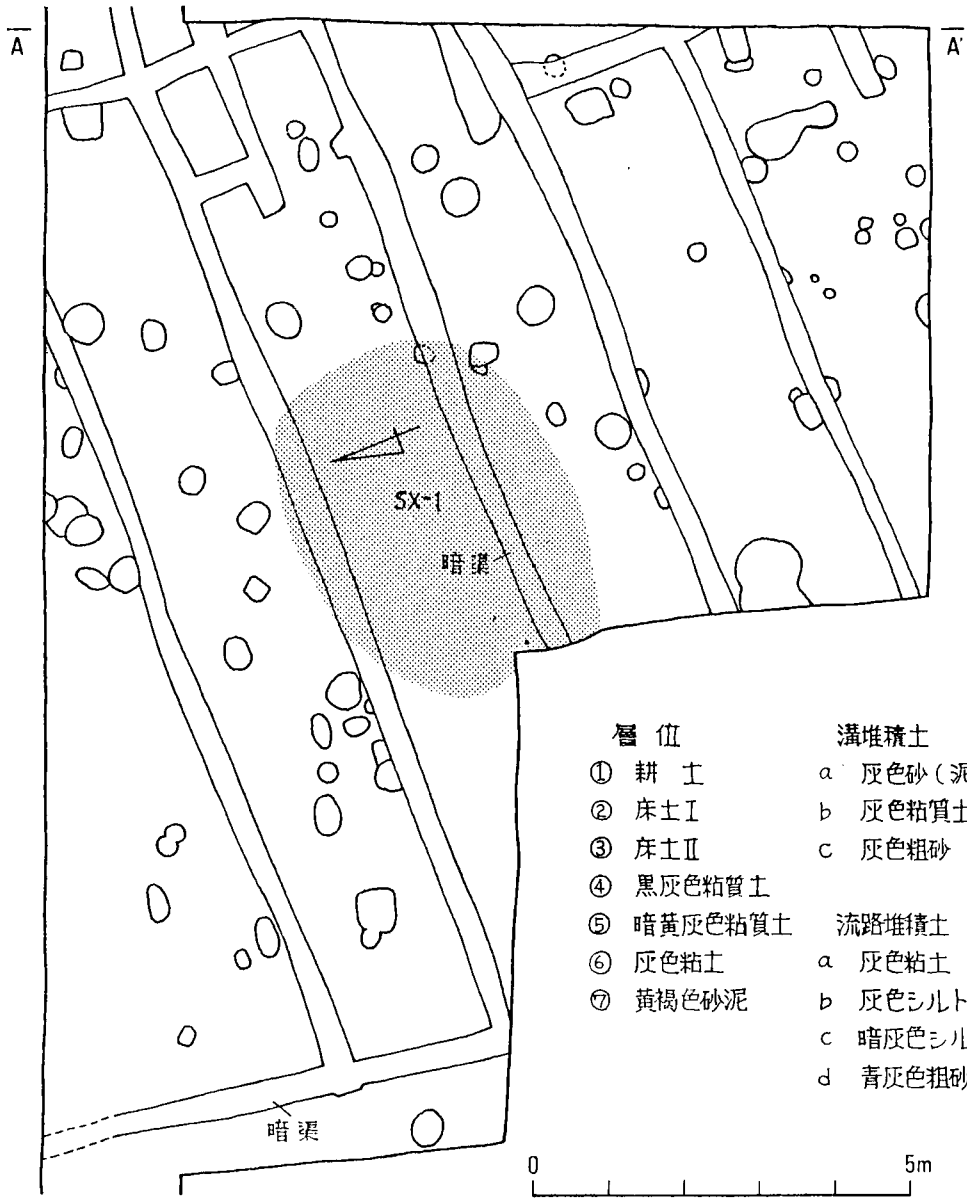
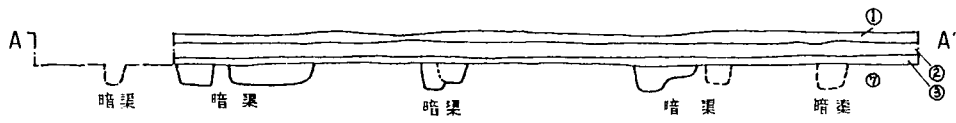
は秦氏の大治水事業により構築されたとされる「葛野大堰^{*}」に関連するものである可能性もある。このため京都市埋蔵文化財センターと同市教育委員会との間で 中学校建設予定地全体を対象とした発掘調査を行うことが決定された。それを受けて京都市埋蔵文化財研究所が同地の発掘調査を1983年11月16日から実施することとなった。

発掘調査は1次1983年11月16日～1984年3月15日（グロットトレンチ合計約3000m²）、2次1984年3月～同年7月（約4800m²）、3次1984年8月～同年9月（約950m²）の3次に別けて対象地のほぼ全面を調査する予定である。今回の現地説明会は1次調査分を対象にしている。

※政事要略 卷五十四

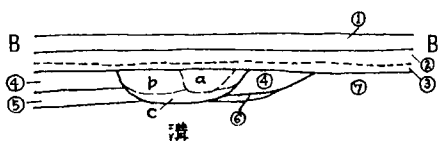
「秦氏本系堰伝。造葛野大堰。於天下誰有比擬。是秦氏率催種類所造構之。」

試掘調査実測図 S=1/100

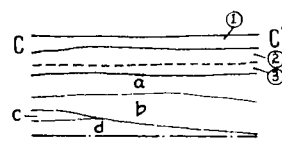


層位	溝堆積土
① 耕土	a 灰色砂(泥混)
② 床土I	b 灰色粘質土
③ 床土II	c 灰色粗砂
④ 黒灰色粘質土	
⑤ 暗黄灰色粘質土	流路堆積土
⑥ 灰色粘土	a 灰色粘土
⑦ 黄褐色砂泥	b 灰色シルト
	c 暗灰色シルト
	d 青灰色粗砂

ピット群実測図



溝断面図



流路断面図

< 1 次発掘調査の概要 >

今回の発掘調査においては、以下のような各時期の遺構を数多く発見し、本遺跡の立地状況とその歴史の変遷の一端を明らかにすることができた。

弥生時代中期の遺構は、円形堅穴住居址一棟（1号住居址 径約 7.5m）、溝1条（溝10）、土坑（堀込1, 6, 7など）、ピットなどがあり、各遺構からは弥生時代の石器・土器などの遺物が出土している。また、低湿地底部等からもまとめて弥生時代中期の土器が出土している。

古墳時代の遺構は中期以降のものを数多く検出している。方形堅穴住居址2棟（2, 3号住居址、2号住居址は4.6×5.4mのプラン規模）、溝数条（溝2～7など）、他に堀込み、潜込み、ピット（柱穴・杭穴を含む）など多数検出している。各遺構からは古墳時代の土師器・須恵器などの各種の遺物が多く出土し、低湿地東肩沿い傾斜面、おそ付近からも古墳時代の「布留式」の土師器がうちすられたような状態で多数出土している。

上述した以外にも、古墳時代後期には形成され、平安時代後期には埋没していたと見られる大規模な溝9や平安時代～鎌倉時代初頭には埋没している小溝群（試掘調査時は「暗渠」と仮称している）などの

遺構を含めて、溝、掘込み、ピット、杭列、杭跡、不定形な掘込みなど、古墳時代及びそれ以降の新しい時期の遺構も多く検出している。

発掘調査で発見した弥生時代中期の円形竪穴住居址、古墳時代中期の方形竪穴住居址、古墳時代後期以降の柱穴（掘立て柱建物の柱穴と見ている）、また各時期に形成された溝等によって構成された各時代の集落址は、桂川沿いの自然堤防状の微高地上に展開している。この微高地の西南側には後背湿地的な小低湿地があり、その低湿地をこえた西側には西向きに至る比較的平坦な高みを確認している。この山側の高みにも少数ではあるが遺構を検出しており、低湿地をこえた西側にも遺跡はひろがるものと見られる。

溝9とした大きな溝は、低湿地西側沿いを北西から南東方向へ流れる。トレンチで検出した部分では幅約5.3m、深さ約1m、グリット調査部分では幅15m前後、深さは最も深い部分で1.5m程度もあり、極めて大規模なものである。その規模、北側への延び、及び古墳時代後期には形成されていた可能性が大きい点などから見て、秦氏によって造られたとされる葛野大堰から分流された用水路の一本にあたる可能性をもち溝と思われる。

上求してきたように、1次調査で得られた成果は極めて大きいと

いえるが、その様相から見て遺跡の一端を明らかにした状態であり、
2次調査によって集落址等遺跡の全体像をより明確にしたいと考えてい
る。

— MEMO —

